
後始末引受人

硯間 隼人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

後始末引受人

【Nコード】

N2422D

【作者名】

硯間 隼人

【あらすじ】

殺人事件の現場の掃除などをしてそこを元通りにする仕事をしている後始末引受人の三鷹啓介。その三鷹の元に一本の電話がかかってくる。電話の相手は少し前に知り合った刑事。会田信次からだ。彼は現場の掃除を頼みたいと電話してきた。だが本当のねらいは三鷹に事件解決を依頼したいために彼に電話をかけたのだ。そこから三鷹の捜査が始まるのだ。

第1話 事件発生

「今日もか…二件もやられてるな…」会田の上司、小牧がコーヒー片手に新聞を読みながらつぶやいた。

「そうですね。都内の放火。いつたい誰なんでしょうね。」

会田は、上司に相槌を打った。うちの上司は無視されることを一番嫌う。

ここ最近おきている都内放火事件、一ヶ月前から始まり、今日まで30日間すべて放火事件がおきている。しかも狙われているのはいつも決まってゴミ捨て場。

幸い、死人が出ていないので捜査一課としては助かっているが、殺人事件も放火事件も犯罪は犯罪だ。必ず捕まえて、刑務所にぶち込まないと。

そんな朝のひと時を過ごしているときだった。署内に無線が響いたのは。

「渋谷区3丁目のマンションで、殺人事件発生。捜査一課は至急出勤してください。」

会田はまだ何も言われていないのに、コートを手に取った。

「おい、会田と佐藤行つて来い。」

小牧が拳で自分の肩を軽く叩きながら命令した。

「はい、行つてきます。」

会田と佐藤は、早足で捜査一課を立ち去った。

「おい、佐藤。被害者は？」

会田は愛車のスカイラインを現場にとばしながら、後輩の佐藤にきいた。

「はい、名前は成岡充、42歳。職業はタレントです。」

「成岡 知らないな…」

会田はもとも芸能界にあまり興味がなかった。

「で、他には？」

「他には、ですか…」佐藤が警察手帳を忙しくめくる音が聞こえた。
「あ、ありました。噂によると、成岡さん。暴力団とのかかわりもあつたとかそうで…」

「そうか…」

会田は頷きながらスカイラインのアクセルを踏みなおした。

30分ほど走ると、事件現場のマンションについた。

落ち着いた感じの色が印象的なマンションだった。

会田は車から出た後、白い手袋をコートのポケットから出しながらマンションのエレベーターのボタンを押した。

会田は事件があつた153室の扉を勢いよく開けた。

会田が、部屋にゆつくりと足を踏み入れると殺人事件に漂つてるにおいに襲われた。

事件があつた部屋は一番奥だった。そこは書斎のような場所で、一番奥にある窓のすぐ手前に被害者はいすに座って死んでいた。死因は頭を銃で撃ち抜かれたと誰が見てもわかる。傷口が額にくつきりと残っているからだ。

窓は、12月だというのにあいており、とても寒かった。床には血が飛び散り白い床を真っ赤に染めていた。

「うわ…」

佐藤が少し気持ち悪そうにしていた。

「あれ、お前現場初めてだっけ。」

「いいえ…絞殺の死体とかなら見たことあるんですけど、ここまで血が出てるのは初めてです…」

佐藤は今にも吐きそうだった。

「誰だって、そんなものさ。佐藤、少し外で休んでな。」

「ありがとうございます…」

佐藤は、腹を抱えて苦しそうに部屋を後にした。

「鑑識はいつ来るんだ？」

近くの刑事に聞いてみた。

「あと五分ほどで到着するみたいです。」

「そうか…じゃあ、そろそろあいつを呼んどかなくちな。」

会田は携帯電話を取り出し、三鷹の事務所に電話をかけた。

第2話 捜査開始

三鷹は机に突っ伏して眠っていた。そんなときだった。

プルルルルルル。プルルルルルル。

事務所の電話が、けたたましく鳴った。

「ったく…なんだよ…」

三鷹はうつとうしそくに電話に答えた。

「はい、三鷹後始末請負店ですが。」

電話をかけてきた相手は、知り合いの刑事の会田だった。

「おお、三鷹か。」

「そうだが、何か用か？」

三鷹は眠くて眠くて仕方ないのだ。

「そんな言い方していいのか。仕事をやろうと思ったのに。」

「本当か！」

三鷹の睡魔が吹き飛んだ。

「ああ、今すぐ都内のマンションに来てくれ。」

「わかった。今すぐ行く。」

三鷹は、いつも着ている黒のダウンジャケットを羽織って、仕事用具を持って現場へと走り出した。

「鑑識、入ります。」

会田が腕組をしている横を鑑識の行列が通っていった。

そんなときにきたのがあの男だった。

「おい、入れてくれって！俺は会田に呼ばれてきたんだって！」

「ダメです！そんな嘘ついたって。ここは警察関係者以外立ち入り禁止なんですから！」

みると、玄関で佐藤が必死に黒のダウンジャケットを着た男を止めていた。

「佐藤。その男は俺が呼んだんだ。入れていいぞ。」

佐藤はきよとんとして、会田を見た。

「…ええ？」

「俺が呼んだの。こいつは三鷹っていうんだ。ある仕事のために呼んだんだ。」

佐藤が呆然と立ち尽くしてる横を、三鷹が通りすぎていった。

「よう、会田。ホテルシルベスタ以来だな。」

「そうだな。」

ホテルシルベスタとは、彼とはじめて会った場所でもあり、彼が初めて事件を解決した場所でもあった。

「で、今回はどんな事件なの？」

「今回は単純だ。ただの銃殺さ。お前には掃除を頼みたいだけ。」

「何だ。そうか…」

三鷹はつまらなさそうにつぶやいた。

三鷹はポケットに手をつ突っ込みながら現場の書斎に足を踏み入れた。

「うわあ、また派手にぶちまけてくれたな。」

三鷹が嫌そうな顔をしていると、鑑識のひとりが話し掛けてきた。

「おお、あなたが三鷹さんですか。ホテルシルベスタの件であなたは警察の中でちょっとした有名人ですよ。」

「そうですか…ところで、もう掃除していい場所ありますか？」

「あつありますよ。あの窓の下の血痕とかならふき取ってもらってもかまいませんよ。」

「あ、わかりました。」

三鷹は作業に取り掛かった。

三鷹は口笛を吹きながら、床を拭いていた。その間会田は、することがなく暇だった。

「会田。この部屋の真下つてゴミ捨て場なんだな。」

三鷹が、窓の外に体を乗り出しながら会田に問い掛けた。

「そうだな。うまくいきやここからゴミ捨てれるんじゃないか？」

会田が冗談を言いながら、三鷹に近寄った。

「ふーん。いけるかもな。」

三鷹は、窓のサッシを拭きながら言った。

「さあ、聞き込み行こうか？」

会田は、佐藤に呼びかけた。

「はい。行きましようか。」

佐藤がコートをとって先に出て行った。

「おい、三鷹。聞き込み行くぞ。」

「何で、俺が？」

三鷹がうつとうしそうに言った。

「おい、三鷹。俺はお前を現場の清掃のために呼んだと思うか。」

「ああ、そう思ってるよ。」

三鷹は、窓のサッシをまだ拭いている。

「ホテルシルベスタの事件解決してくれただろ。今回も頼むよ。」

会田は手を合わせて、頼む！というしぐさをしている。どうやら掃除を頼みたいというのは冗談だったらしい。

「やってもいいけど、報酬は？」

「そりゃ、たんまりと。」

「俺、近江牛が食べたいな。」

「えっ…まあいいさ。」

三鷹は窓のサッシを拭くのをやめ、会田についていった。

第3話 聞き込み

聞き込みで最初に向かったのは現場の隣の松浦さんの家だった。チャイムを鳴らすと、白髪の男の人が扉の奥から、顔を出した。おそらく松浦さんだろう。

「すいません。警察ののですが、少しききたいことがあるのですが…」

会田は、警察手帳を見せて聞き込みのときに使ういわゆるセールストークを存分に使って白髪の男性にしゃべりかけた。

「なんじゃ。警察がわりに何のようじゃ。」

白髪の男性は、ぶっきらぼうに言葉を放った。

「私は、捜査一課の会田信次。こっちは後輩の佐藤兼次です。」

「その後ろにいる奴は誰だ？」

白髪の男性は、黒のダウンジャケットを着た男を指差した。三鷹だ。

「あつ。俺ですか。俺は三鷹啓介。後始末引き受け店やってます。」

「なんじゃそりゃ…まあ、そんな事どうでもいい。で、警察が何のようじゃ。」

会田は警察手帳を開いた。

「実は、隣の部屋で殺人事件がありまして、その犯人を探しているのですが…」

「何か、心当たりはありませんか！」

佐藤が張り切った様子で白髪の男性にきいた。

「残念だが知らんよ。だがよく隣の部屋で口論しているのはよく聞くがな。」

「それはいつですか！」

会田と佐藤は声を揃えてきいた。

「確か、一週間ぐらい前だったと思うぞ。」

「ありがとうございます。」

結局、白髪の男性からはこれしかきき出せなかった。

次に向かったのは、事件現場の真下の階の鈴木さんの家だった。松浦さんのときと同じようにチャイムを鳴らすと、今度は若い女性が出てきた。

「すいません、警察のものです。今うえで起きた殺人事件について聞き込みしてるとこなのですが協力してもらってもかまいませんか？」

女は、新宿二丁目で働いていそうな格好をしていた。顔もそんなに悪くなかった。

「はい…別にいいですけど…」

女は多少おびえた様子で答えた。

「昨日の夜、何か変わったことはありませんでしたか？」

今度は会田が質問した。

「そうですね…特には…」

「そうですね…」

会田があきらめた瞬間、女は声を荒げた。

「あつ、思い出しました！でもこれあんまり事件に関係ないかも…」女は口を閉ざした。

「どんなことでもかまわないんです。教えてください！」

佐藤も声を荒げた。

「はい、わかりました。あれは確か午前1時くらいだったと思います。私が洗濯物を取り込んでいると、突然、上から赤い光が下に向かって落ちていったんです。」

女は信じて欲しい目でこちらを見てきた。

「はあ…そのあと下は見てみましたか。」

会田は、半ばがっかりしながらきいてみた。

「いえ、みてません。」

「何故です。」

「そのときは何かの見間違いだろうと思ったので。」

「そうですね…」

会田は警察手帳を閉じ、女にお礼を言った。

「捜査にご協力ありがとうございます。」

「いえいえ。」

会田はゆっくりと扉を閉めた。

「有力な情報は手に入りませんでしたね。」 佐藤が半ば落ち込む感じで言った。

「ああ、そうだな。」と会田が言ったとき、三鷹の声が聞こえてきた。

「この事件面白くなってきたな。」

三鷹は、黒のダウンジャケットのポケットに手を入れて、会田たちを追い越した。

「おい、どこに行く。」

「管理人室。防犯カメラの映像見たいんだ。」

そのとき、会田は三鷹の心に推理の火がついたのを感じた。

第4話 防犯カメラ

管理人室は、マンションの一階にある。会田たちはそこに階段を使つて向かった。

「管理人さん。管理人さん。すいません警察のものです。」

会田が、ドアをバンバン叩きながら管理人を呼んだ。どうやら相当耳が悪いらしい。

「あいあい。ちよつとまつとくれよ。」中から70代ぐらいのお爺さんの声が聞こえてきた。

「すいません。警察のものです。」

「何度もいわなくてもわかつてるよ。」

ゆつくりと扉が開いた。中から出てきたのは、予想通り70代ぐらいの白髪のお爺さんが出てきた。

「すいません。監視カメラの映像を見たいんですが。」

「えっ。なんだって!」

やはり耳が悪いらしい。

会田がお爺さんとの話しに悪戦苦闘してる横を、三鷹はすつと通り過ぎ、管理人室へ入っていった。

「どれだ。映像は…あつこれが。」

そこにあつたのは、各階とエレベーターの映像が写っているモニターだった。

「これだな。」

会田が遅れて入ってきた。どうやらお爺さんとの話しに決着がついたらしい。

「ちよつとどけ。」

会田は、モニターの前に立っている三鷹に手ではたくような動作をしてそこをどくよう指示した。

「ええと。何時のをみたいんだ。三鷹。」

「お前、それ操作できるの?」

三鷹が半信半疑の顔で聞いてきた。

「できるとも。最初はできなかったのだが捜査に何回もいつていると覚えちゃったんだよ。」

「そうか。ところであの被害者。死亡推定時刻は何時？」

「解剖の結果が出ないとなんともいえないが、おそらく午前1時くらいだな。」

「そうか。じゃあ、午前12時のエレベーター内の映像をみせてくれ。」

会田は頷き、テープを巻き戻しはじめた。

数分後、巻き戻しが終わり、一番下のモニターに午後12時の映像が流れ始めた。

そこに写っていたのは、灰色のタイルと灰色の壁だけだった。たまに乗り降りする人もいるが、全然怪しくもない。

「おい、三鷹。これに何か写っているともいうのか。」

まだ数分しかみてないのに、会田がぼやき始めた。

「まあ、そんなにあせんって……おい、今のところもう一回！」

会田は急に言われたので驚いたが、それを顔に出さずにテープを少し巻き戻した。

「再生しろ。」

「へいへい……」

会田が言われるがまま再生ボタンを押した。

「ほらここ！」

三鷹はモニターを指差した。

三鷹が指差した場所に写っていたのは、頭から足まですべて黒でコーディネートされている男だった。

そいつはあたりをキョロキョロしながら、エレベーターから降りていった。怪しい。

「犯人は、こいつか。」

会田は三鷹にきいてみた。

「その可能性はある。」

「よし、佐藤。こいつの身元を探れ！大至急だ！」

佐藤は大慌てで管理人室を飛び出していった。

「今回の事件はお前要らなかったな。」

「いや…この事件には何かある。」

三鷹の顔は険しくなっていた。

「会田、コーヒーのみたいんだけど。」

「じゃあ、近くの喫茶店にでも行こうか。」

「ああ、そうしよう。」

二人は管理人室を後にした。

第5話 燃えカス

マンションから出て日の光を浴びるのは3時間ぶりだった。

「どこか、喫茶店あるかな。」

会田は三鷹とともに街路樹の並ぶ道を歩き始めた。

歩き始めた瞬間だった。突然三鷹が足を止めマンションと雑居ビルの間をじっと見ていた。

「あれ、ゴミ捨て場だよな。」

「ああ、そうだな。」

三鷹がみていたのは、アメリカンコミックなどでボケ役が頭から突っ込む大きなゴミ箱だった。

「会田ちよつと来てくれ。」

三鷹はゴミ箱のほうに歩き出した。

三鷹はゴミ箱まで行くと突然しゃがんだ。

「おい、三鷹ゴミ捨て場なんか何があるんだよ！それにゴミ箱の中身は今日ゴミ回収の日だから中は空っぽだぞ！」

会田の言う通りにゴミ箱の中身はなかった。だが三鷹はそこを動かうとはしなかった。

「これなんだろう。」

三鷹は黒い何かを手にとった。

「どこで拾った？」

「ここに落ちてた。」

三鷹はここだ。という風に指で下の地面を差していた。

「なんだろう。この黒いのは。」

会田がきいてみると、三鷹は手触りを確かめながら

「多分何かが燃えたあとだな。」と答えた。

「何かが燃えたあと？」

「そうだ。放火かなんかかな。ほら今都内で連続している。」

「そうか！」

会田はわかった顔をしたが、その顔はすぐに元に戻った。

「それはないな。」

「どうして。」

「それはだな。昨日はここでの放火の通報はきいてない。昨日は別の場所が放火されてたからな。」

「そうか…」

三鷹はポケットに燃えカスを押し込み、立ち上がって歩き始めた。
「おい会田。喫茶店、探すぞ。」

第6話 事件の輪郭

三鷹と会田は事件現場から五分ほど歩けばつく喫茶店にいた。

「三鷹、今回の事件、やっぱり単純だろ？」

「どうしてそう思うんだい。」三鷹がコーヒースをすすりながら尋ねた。

「だって、被害者は銃で頭を打ち抜かれたんだ。だったら話は簡単だ。防犯カメラに写っていた黒ずくめの男。あいつが犯人だ。あいつは暴力団関係者で何か情報が被害者に漏れたから殺しにいった。事件の真相はきつとそうだ。」会田は熱弁した。

だが、三鷹はコーヒースをテーブルにおき語り始めた。

「俺の推理は違う。俺が思うにこれは自殺だ。」

「自殺だって!？」

会田は喫茶店ということを忘れ、大声で叫んだ。おかげで周囲の客が会田たちをジロジロとにらんできた。

「それは本当なのか？」

「おそらくな。だがトリックは大体わかったのだが肝心の動機がわからない。そこで会田に調べて欲しいことがある。」三鷹は再びコーヒースをすすり始めた。

「何だ。」

「まず、彼の実家の住所だ。」

「それならわかってるぞ。ここだ。」

会田は警察手帳をページ破って三鷹に手渡した。

「じゃあ、話は早い。俺はここに向かうから、会田は保険会社にいつて被害者に生命保険がかかっているかどうか調べてくれ。」

「わかった。じゃあ行ってくる。」

会田は席を立とうとした。だが三鷹がそれを引き止めた。

「どうした？」

「タクシー代貸してくれ。俺金ないから。」

まったくという気持ちに襲われたものの、会田は仕方なく2万円を三鷹に手渡した。

第7話 動機

会田は自慢のスカイラインを飛ばして保険会社に向かっていた。保険会社には五分ほどでついた。会田はスカイラインを会社の前に止めて、会社の中に入っていった。

「警察だが、大至急確認したいことがある。」

会田は警察バッジを見せながら、受付に話し掛けた。

「な、なんでしょうか。」

受付の女性は少し驚いた様子で言葉を返した。

「成岡充さんが生命保険に加入しているかどうか知りたい。」

「かしこまりました。では少しお待ちください。」

受付はどこかに電話をしていた。

しばらくすると、受付が話し掛けてきた。

「はい、成岡さんは確かに生命保険に加入されています。」

「ちなみに保険金の額はどれくらいですか。」

「三億円です。」

会田は開いた口がふさがらなかった。

「あ、ありがとうございます。それでは失礼します。」

会田は保険会社を飛び出し、携帯電話を手にとり三鷹に電話をかけた。

そのとき三鷹はタクシーで成岡の実家に向かっているとだった。

突然携帯電話が鳴り響き、三鷹は急いで携帯を手にとった。

「はい、もしもし。」

「俺だ、会田だ。」

「何かあったのか？」

「ああ、成岡は生命保険に入っていた。しかも保険金は三億円だぞうだ。」

「そうか。じゃあ会田は事件現場にいてくれ。二時間ほどでそっち

にいくから。」

「わかった。」

三鷹は電話を切り、少し寝た。

「お客さん、つきましたよ。」

タクシーの運転手が三鷹を起こした。

「あ、ありがとうございます。」

「お代は5600円ね。」

タクシーの運転手は、メーターを見ながら三鷹に言った。

「運転手さん、俺二万出すからさ。ここで少し待っててくれない？」

運転手は少し考えた後、三鷹にしゃべりかけた。

「逃げないでくださいよ。」

「もちろん。」

三鷹はタクシーから降りて、目の前にある古風な家の表札を見た。
『成岡』とかいてあった。ここに間違いない。

三鷹は扉をノックした。だが反応がない。

「あれ、いないのかな……」三鷹は何度もノックしたが誰も出てこなかった。

そんなときだった。三鷹の後ろをひとりのおばあさんが通っていた。

「あれ、あんた成岡さん訪ねてきたの？」

「はい、そうなんですけど。」

「成岡さん入院しているのよ。それかなり重い病気で。すぐに手術しないとイケないんだけどその手術にはものすごくお金がかかるらしいの。大変な状態なのよ。」

「そうなんですか……」三鷹は何かを考えていた。

「おばあさん。入院しているのは、男？それとも女？」

「女よ。お爺さんのほうは先に死んでしまったからね。」

「ありがとうございます。」三鷹は深々と頭を下げた。

「何が？」おばあさんはよく意味がわかってないようだ。

「それではさようなら。」三鷹は待たせていたタクシーにとびのつた。

「さようなら??」おばあさんは意味がわからないまま三鷹を見送った。

「運転手さん、さっきの喫茶店まで。大急ぎでね。」

第8話 真相

会田は三鷹に指示されてから、二時間は待っていた。

「遅いな…」

会田はいらつくと貧乏ゆすりをするくせがある。今回もその癖が出ようとしたとき、三鷹と分かれた喫茶店の前にタクシーが一台止まった。

中から降りてきたのは三鷹だった。

「おい！三鷹！遅いぞ。」

会田は大声で反対側にいる三鷹に大きな声で呼びかけた。

だが、三鷹はそれを無視して横断歩道を渡って会田のもとにゆっくりと歩いてきた。

「遅いぞ。三鷹。」

「ごめんよ。だけど事件の真実はわかったぞ。」

「本当か！？」

「ああ、だからまず現場に行こう。」

三鷹と会田は事件現場のマンションに入っていった。

「じゃあ、トリックを明かそうか。」

三鷹は手をこすり合わせて、事件現場の書斎の机に腰をかけた。

「この事件のキーポイント。それは事件の次の日がゴミの回収日だったこと。もう一つは都内での放火。この二つだ。」

三鷹はポケットから燃えカスを取り出した。

「この燃えカスが、犯人唯一のミスだ。」

三鷹は堂々と言い放った。

「それがミスだとはわかったが、お前が喫茶店で言っていたこと。

ええとなんだっけ…」

「成岡が自殺ということかい。」

「そう、それだ。何故自殺なんだよ。」

「それを今から解き明かす。」

三鷹は立ち上がった。

「まず、成岡は12時ごろにエレベーターに乗り込んだ。このときの衣装は黒ずくめ。」

「まさか…」

「そうだ。俺たちが防犯カメラで見た映像。あれは成岡自身だったんだ。」

「マジかよ…だが、成岡の部屋からは黒ずくめの服は出てこなかったぞ。」

会田の言っていることは事実だった。

だが三鷹はそれを覆した。

「そこなんだ。ではどうやって成岡が黒ずくめの服を処分したか。これを教えよう。」

三鷹は書斎の窓に近づいた。

「ここから、落としたんだ。」

三鷹は下を指差している。そこにはゴミ捨て場があった。

「だが、そこから落としても服とかだったら朝ゴミ捨てにきた人にばれるだろ。」

会田が反論した。だが三鷹はそれも覆した。

「そう、そこなんだ。そこをとくにはしたの人の証言が役に立った。」

「どういう意味だ。」

「彼女は赤い玉を見たと言っていた。実はそれは黒ずくめの服が燃えて落ちているところを見たんだ。」

「燃やしただと!？」

その発想は会田にはなかった。

「そう、燃やしたのさ。都内で発生している連続放火事件に見立ててね。」

三鷹は会田にしたの大きなゴミ箱の前で拾ったものをみせた。

会田は納得しそうになったが、重大なことに気づいた。

「おい、三鷹。銃はどこにやった？」

「銃？」

「そう、銃だ。成岡の死因は頭部を銃で一発だ。これは変えがたい事実だ。ちゃんと銃弾も見つかったしな。」

「会田、君は本当に頭が固いな。よくそれで刑事をやっているな。」
三鷹はくすくすと笑い始めた。

「どういうことだよ。」

「わからないのかい。会田。じゃあ教えてあげよう。服と一緒に落としたのさ。」

「服と一緒にだと！？それじゃあ自分の頭を打ち抜いたあと服に火をつけて一緒に落としたのかい。そうとでも言うのか。三鷹。」

「違う、銃は勝手に落ちていったんだ。そのトリックはこうだ。」

三鷹は被害者が座っていたいすに腰掛けた。

「まず、黒ずくめの服にたこ糸が何かで縛り、油をたっぷりかけ染み込ませる。」

「そのあとに、そのたこ糸を銃に結びつける。これで完了。」

「あとは、黒ずくめの服を窓の外に出して火をつけ、自分は銃を持って椅子に座る。そして引き金をひく。」

三鷹は指でピストルを作って自分の眉間に向けた。

「あとは自分が死んだため、だらんとした手から銃が自然に抜け落ち、油が染み込んだ服の重さに引つ張られて、銃も服も燃えながら落ちていく。そしてゴミ箱にきれいに入る。火が回らなかったのはおそらく、あらかじめゴミ箱の中に水でもまいていたんだろ。燃えるのは服だけになる。これでトリック完了だな。」

三鷹は説明を終えてほっとしたのか、いすに深く腰掛けた。

だが会田は納得いかなかった。

「三鷹。じゃあ暴力団との口論はなんなんだ？」

「おそらく、それは自作自演。警察に犯人は暴力団と思い込ませたかったんじゃないかな。」

それでも三鷹は納得いかなかった。

「おい、三鷹。もしそのゴミ箱の火を誰かが見て通報したらこのトリックはパーになるんじゃないか。」

「いや、そうはならない。むしろ成岡は見つかるのを願っただろう。」

「どうして。」

「成岡としては、これを殺人とみせたかった。そのためには自分自身が凶器を持っていたら不自然だ。そのために落としたんだろう。火をつけたのもおそらくそのためだ。」

会田はなるほど。という顔をして次の質問をぶつけた。

「じゃあ、動機は何だ。」

「おそらく保険金目当てだろう。成岡の実家を訪ねるとお母さんは入院中で手術が必要らしい。だが手術の代金はとても高くて成岡には払えなかったのだろう。だから苦悩の末自殺したんだろう。」

「親思いのいい奴だったんだな。」

「そうみたいだな。」

三鷹はポケットからタバコとライターを取り出して火をつけた。

三鷹は窓から夕焼けを見ながらタバコをふかした。

「ありがとう、三鷹。今回も事件解決してくれて。約束の近江牛だけど今から行くか。」

会田は三鷹に尋ねてみた。

「ああ、近江牛か。食べに行こう！」

「そうだな。」会田と三鷹はゆっくりと部屋を出た。

そのとき三鷹がつぶやいた。

「成岡、あんたはバカだな。親助けるのに自分の命ささげちゃうなんてな。本当笑っちゃうよ。だけどあんたがやろうとしたこと。俺がやりとおしてやるからな。」

「ん？なんかいったか？」

「いや何も。それより近江牛食べようぜ！」

三鷹は会田の背中を押して、部屋から出て行った。

スカイラインをとばしている途中、三鷹がしゃべりかけてきた。

「あのさ、会田。頼みがあるんだけど…」

「ん？なんだ？」

「実は…」

ここから先は三鷹が会田の耳元で小さな声で言ったので聞き取れなかった。

「わかった。そういうことにしよう。」

「ありがとうございます。」

最終話 その後

3日後、三鷹の姿は病院にあった。成岡の母がいる病院だ。

三鷹は看護婦に病室をきいて成岡の母の病室に向かった。

コンコン。三鷹は軽く扉をノックして中に入った。

中には、静かに眠っている老婆がひとりいた。おそらく成岡の母だ。

三鷹はおばあさんを起こさないようにそつと手紙とパンパンになった封筒を二つ横のテーブルの上に置いて静かに病室を後にした。手紙にはこう書いてあった。

母へ

やつとお金のできたので送ります。

遅くなって申し訳ありません。

本当は自分の手で渡したかったんだけど渡せなくなってしまったので、友達に頼んでおきました。

話はコロコロ変わりますが、封筒の中には二つあわせて2000万円入っています。それで手術を受けて元気になってください。長生きしてください。

充より

三鷹が病室をでたらそこには会田がいた。

「渡せたか？」

「眠っていたから、おいてきたよ。」

「それが一番だな。」

「だろ。」

「それにしてもお前があんなこととはな。やさしいところもあるんだな。」

「まあな。」

三鷹が会田に頼んだのは『成岡の保険金を自殺だけど支給して欲しい。』というものだった。三鷹は成岡の母に手術を受けさせるためにどうにかできないかと会田に頼み込んだところ、会田は素直にこの頼みごとをきいてあげた。

会田は保険会社に電話して、保険金の一割でも払ってくれないだろうかと頼んだところすんなりOKしてもらい、3000万円を手に入れることに成功した。

だが、ここで問題が発生する。成岡の母にあげたのは2000万円。残りの1000万円は何に使ったかというと、現場の清掃費だ。壁紙から床まですべて変えたため、けっこう費用がかかってしまったという次第だ。

「会田、今から飲みに行こう。」

「おい、今からって昼だぞ。本当に飲むのか。」

「当たり前だ。夜まで飲みつづけるぞ。」

三鷹があまりにも張り切っているので仕方なく会田も付き合うことにした。

「仕方ない。ただし割り勘だぞ。」

「文句はない。」

二人は笑いながら病院を去り、無機質なビル群に消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2422d/>

後始末引受人

2010年10月21日21時20分発行